

富山県大山町

一ノ瀬遺跡発掘調査報告

—ゴルフ場建設に伴う発掘調査—

1994年3月

富山県埋蔵文化財センター

大山町教育委員会

序

大山町教育委員会では東福沢のゴルフ場建設に先立ち、当地域の一ノ瀬遺跡等埋蔵文化財包蔵地を平成3年度に試掘調査、平成4年度に本調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代や平安時代の遺構や遺物が出土し、古くから当地域に人が住んでいたことが判明いたしました。

この一ノ瀬遺跡の調査をまとめた本書が多くの方々に活用され、今後の文化財保護の一助となれば幸いです。

最後に、今回の調査及び報告書刊行にあたり、ご協力いただきました富山県埋蔵文化財センターをはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

大山町教育委員会

教育長 津田 憲一

例　　言

1. 本書は、富山県上新川郡大山町東福沢地内に所在する一ノ瀬遺跡の発掘調査報告である。
2. 調査は大山カメリアカントリークラブ新設工事の実施に先立ち、大山町教育委員会が実施した。調査の実施にあたっては富山県埋蔵文化財センターから調査担当者の派遣を受けた。
3. 調査事務局は大山町教育委員会に置き、課長代理 中村 昭徳が調査事務を担当し教育課長 高森 魁が総括した。
4. 調査期間・面積は次のとおりである。

調査期間	試掘調査 平成3年6月3日～6月7日	調査面積：624.5m ²
本調査	平成4年6月29日～8月26日	調査面積：4,036m ²
5. 試掘調査、本調査担当者は次のとおりである。

試掘調査	調査担当者 富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 島田修一 同	越前慶祐
本調査	調査担当者 富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 高梨清志	
6. 遺物整理、本書の編集と執筆は富山県埋蔵文化財センターの職員の協力を得て、調査担当者がこれにあたった。特に、石器の石質については越前慶祐氏の手を煩わせた。
7. 本書の挿図内の方位は真北、水平基準は海拔高である。
8. 基準杭は調査区の中央を通る稜線にそって任意に設定し、調査終了後三角点測量を実施した。なお、基準杭のX軸は真北から2°30'西へ偏る。
9. 出土品および記録資料は富山県埋蔵文化財センターで保管している。

目　　次

序文	II. 調査概要	3
例言	1. 地形と本調査の経過	3
目次	2. 基本層位	3
I. 序章	3. 遺構	4
1. 位置と環境	4. 遺物	9
2. 調査に至る経緯	III. まとめ	14
	参考文献	
	写真図版	

挿図目次

第1図 地形と周辺の遺跡	第7図 出土遺物実測図
第2図 試掘調査位置と遺跡範囲	第8図 出土遺物実測図
第3図 地形と区割り図	第9図 出土遺物実測図
第4図 遺構概略図と基本層位	第10図 出土遺物実測図
第5図 炭窯01・02	表1 大山カメリアカントリー造成関連試掘 調査一覧
第6図 烧壁穴、SK44	表2 伏焼式炭窯一覧（富山県内）

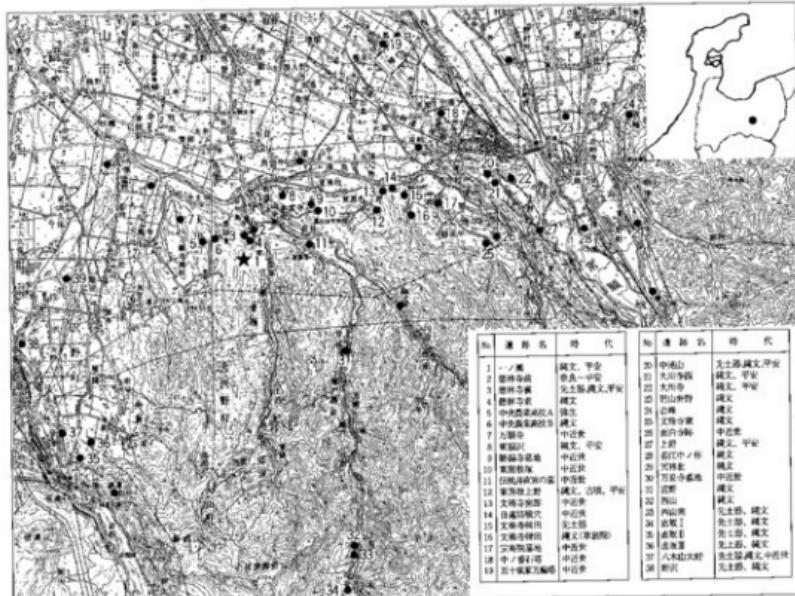
I. 序 章

1. 位置と環境（第1図）

本書で報告する一ノ瀬遺跡は、富山県上新川郡大山町東福沢地内に所在している。

大山町は富山県の南に位置し、県内市町村としては最大面積を占める。町域は97%が立山連峰の薬師岳を中心とした山地、2%が平地、1%が台地である。北側の立山町との境には常願寺川が流れ、町の中心部である上流を扇頂として富山平野の主要部分をなす扇状地を形成している。常願寺川上流部には河岸段丘が発達し、高位段丘で標高500~600mを測る栗巣野台地、下位段丘で標高120~250mを測る上野段丘がある。

一ノ瀬遺跡は上野段丘の西側にある台地上に位置している。この台地は、常願寺川の旧扇状地が隆起した後、熊野川とその支流により開析、形成された。町内の遺跡の大部分はこの台地から上野台地に至る地域に集中し、早くから東黒牧上野・東福沢・文殊寺稗田遺跡など縄文時代の遺跡が多いことで知られていた。昭和60~63年にかけて町史編纂事業、学園都市建設事業を契機に台地周辺の遺跡の分布調査〔久々1986・1989〕が進み、縄文時代だけではなく奈良~平安時代の遺物も散布することが明らかとなった。



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/100,000)

2. 調査に至る経緯（第2回）

(1) 調査に至るまで

平成元年春、大山町東福沢地内に山林地帯に民間資本によるゴルフ場を核とした大規模リゾート開発計画が策定された。この計画策定に伴い、大山町教育委員会では、平成元年の4月に富山县埋蔵文化財センターから調査員の派遣を得て事業区域内の遺跡分布調査を実施した。この調査により7箇所で遺物散布地並びに遺跡立地推定地が確認された。この結果をもとに町教育委員会は関係機関と当該遺跡の保護措置について協議を重ね、一部については計画変更により現状保存、その他については遺存状況と範囲を確認するため試掘調査を実施することで合意した。

(2) 試掘調査

平成3年度に3期にわたり実施した。調査結果については下表に示したとおりである。なお、試掘調査で明らかとなった一ノ瀬遺跡については翌平成4年度に本調査を行なうことになった。

表1 大山カメリアカントリー造成関連試掘調査結果一覧

No.	遺跡名	調査期間	対象面積	発掘面積	発見された遺構	発見された遺物	時代	備考
1	一ノ瀬遺跡	H.3.6.3~H.6.7	8,500m ²	625m ²	炭窯2・焼壁穴3 焼土塊4	縄文土器?・石器 須恵器	縄文? 平安	約4,500m ² で遺跡の広がりを確認
2	タ A地区	タ	700m ²	49m ²	なし	なし		
3	タ B地区	タ	500m ²	64m ²	タ	タ		
4	タ C地区	タ	1,000m ²	11m ²	タ	タ		
5	一ノ瀬砦跡?	タ	7,700m ²	96.5m ²	タ	タ		旧林道跡を確認
6	徳林寺前遺跡	H.3.8.29	250m ²	4m ²	タ	タ		
7	徳林寺裏遺跡	H3.8.29~H4.1.17	1,450m ²	96m ²	タ	須恵器・土師器	平安	主体部は現状保存



第2回 試掘調査位置と遺跡範囲 (1/15,000)

II. 調査概要

1. 地形と本調査の経過（第3図）

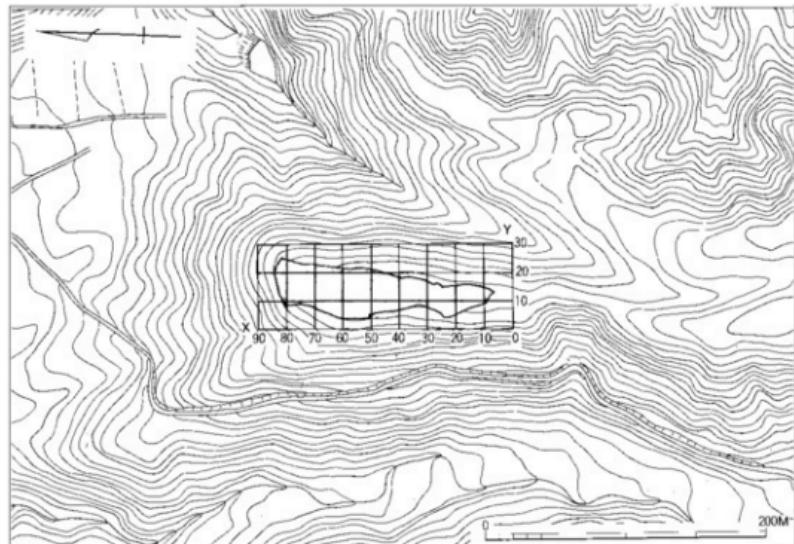
遺跡は南から延びる丘陵先端部の尾根上に立地している。北側には富山平野が開け、東西は熊野川の支流により開析された谷である。標高は約170mを測り、現状は雜木林である。

本調査は事前に立木の伐採除去を行なったあと、試掘調査の結果をもとにバックホウによる表土除去を行なった。次に尾根線上にそって10m間隔の基準杭の設定を行ない $2 \times 2\text{ m}$ を一区画とした。なお、調査区の西側は地崩れの跡のため、この部分の調査は出来なかった。調査面積は $4,036\text{ m}^2$ 、調査期間は6月29日～8月26日までの、延べ34日間であった。

2. 基本層位（第4図）

当地区は昭和初期に福沢地区に農民道場（現在の県立中央農業高校）が建設され、それに伴ない開墾したため、調査区付近は削平され平坦地になっている。

基本層位は調査区の西側中央では①層：灰色シルト（表土）・②層：淡灰色シルト・③層：明褐色シルト・④層：淡黄褐色シルト・⑤層：黄褐色シルトである。炭窯、焼壁穴などの遺構は②層上面から掘り込まれる。凹石など縄文時代の遺物は②層から出土しており、②層は縄文時代の文化層と考える。X 67・Y 22の③層上面で先土器時代～縄文時代草創期と思われるスクレイバーが1点出土したため、出土地点付近と調査区南端で深掘り用のサブトレーンチを設定し、⑤層まで掘り下げたが遺物などは確認出来なかった。



第3図 地形と調査区割図（1/4,000）

3. 遺構 (第4~6図)

炭窯・焼壁穴・土坑を検出した。炭窯、焼壁穴からは遺物は出土していない。

(1) 炭窯 3基検出した。3基とも伏焼法(堆積製炭法)による炭窯と考える。

a 炭窯01 調査区北端の斜面に位置する。検出面から窯体の床面まで15cmを測る。主軸をS-61°-Eにとり、窯体は斜面に対しほぼ平行に作る。平面形は隅丸の長方形で、焚口部分より奥壁部分の幅が広く“肩の張った”長方形である。規模は幅143cm(奥壁)・115cm(焚口)・長さ353cmを測る。奥壁に煙り出しをもち、窯体側から掘削している。煙出しの直下から、窯体の中心軸にそって排水溝が設けられる。床面は、ほぼ平坦で、被熱して黒褐色を呈する。操業面は1枚である。覆土には多量の炭化物が入る。

b 炭窯02 調査区中央の平坦部に位置し、主軸をN-3°-Eにとる。遺存状態は悪く、窯体は削平され床面と煙出しの一部が残る。平面形は隅丸長方形で、奥壁に1つ煙り出しをもつ。排水溝は検出出来なかつたが、焚口の中央部付近がわずかに凹んでおり焚口から浅い排水溝があつたらしい。規模は幅(奥壁)160cm、長さ357cmを測る。覆土には多量の炭が入る。床面はほぼ平坦で、被熱して黒褐色を呈する。操業面は1枚である。

c 炭窯03 調査区の南部に位置する。削平されており遺存状態は悪く、床面の一部が残存するのみであり、規模・主軸方向は不明である。

(2) 焼壁穴 調査区全域に分布し14基検出した。

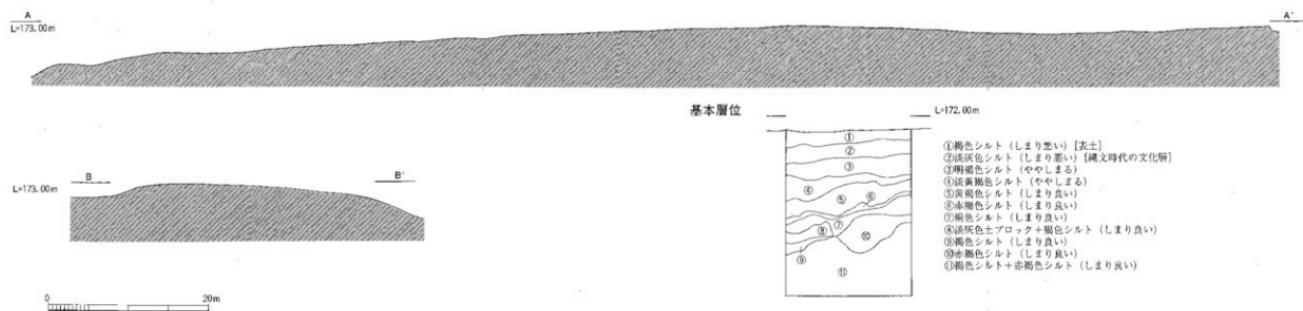
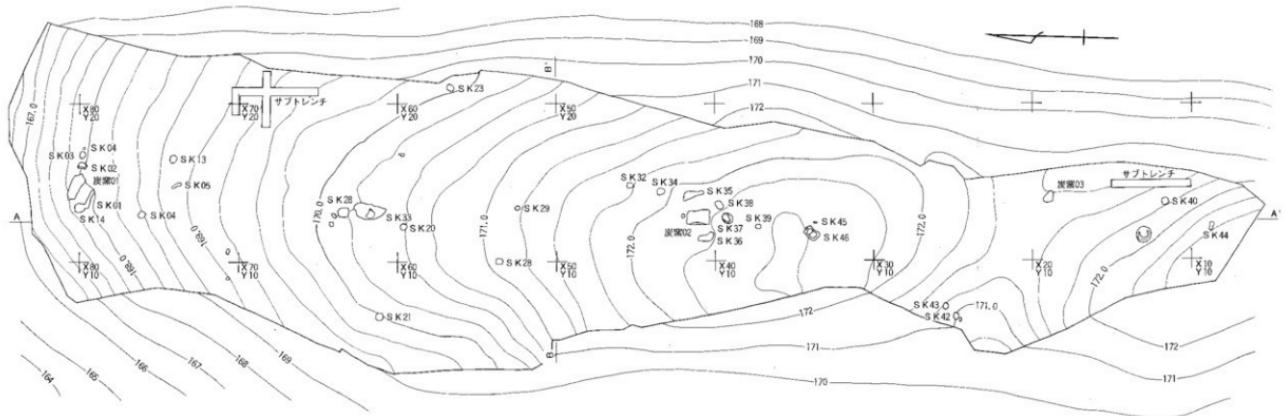
壁面のみ被熱するAタイプ(S K 13・23・28・29・33・34・40・42・43・45)と壁面と底面が被熱するBタイプ(S K 18・20・21・46)の2種類に分けられる。A・Bタイプとも平面形は円もしくは梢円を呈し、直径56~98cmを測る。Aタイプは台形・Bタイプは浅い皿状の断面形を呈し、深さ10~34cmを測る。深くなるに従いAタイプが多くなる。覆土の上層には炭化物は見られないが下層は多量の炭化物・焼土が混入する。1基の操業は1度きりである。S K 45・46は切り合っており、統けて操業している。

(3) 土坑 調査区全域で10基検出した。遺物が伴った土坑はS K 44のみである。

a S K 01・14 炭窯01の南、斜面の上部に窯体と並行して検出した。S K 01の平面形は隅丸長方形で、規模は長軸256cm、短軸40cm、深さ8cmを測り浅い。S K 14は梢円形を呈し、規模は長軸138cm、短軸118cm、深さ50cmを測る。共に覆土は地山とほぼ同じ土が入り、一気に埋められている。覆土に炭を含み炭窯01と並行しており、炭窯01の付属施設の可能性がある。

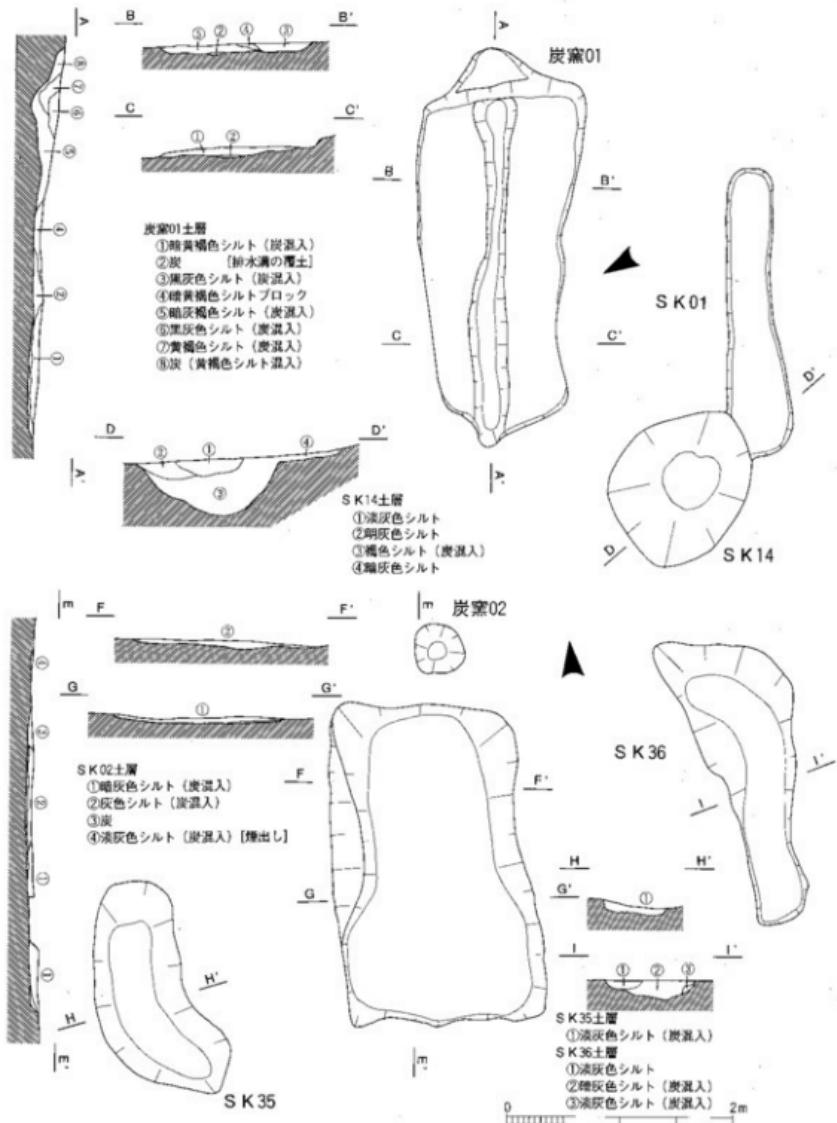
b S K 35・36 炭窯02を取り囲むように位置する。S K 35は不定形を呈し、長軸200cm・短軸84cm・深さ8cmを測る。S K 36は不定形を呈し、長軸254cm・短軸63cm・深さ18cmを測る。共に覆土には炭化物を含み炭窯02の付属施設の可能性がある。

c S K 44 平面形は梢円形を呈し、長軸204cm、短軸178cm、深さ92cmを測る。断面は台形状を呈し途中で平坦部をもつ。覆土は地山とほぼ同じ土が入り、一気に埋められている。遺物は覆土の③層から須恵器の壺肩部破片が出土し、④層から土師器碗が出土している。

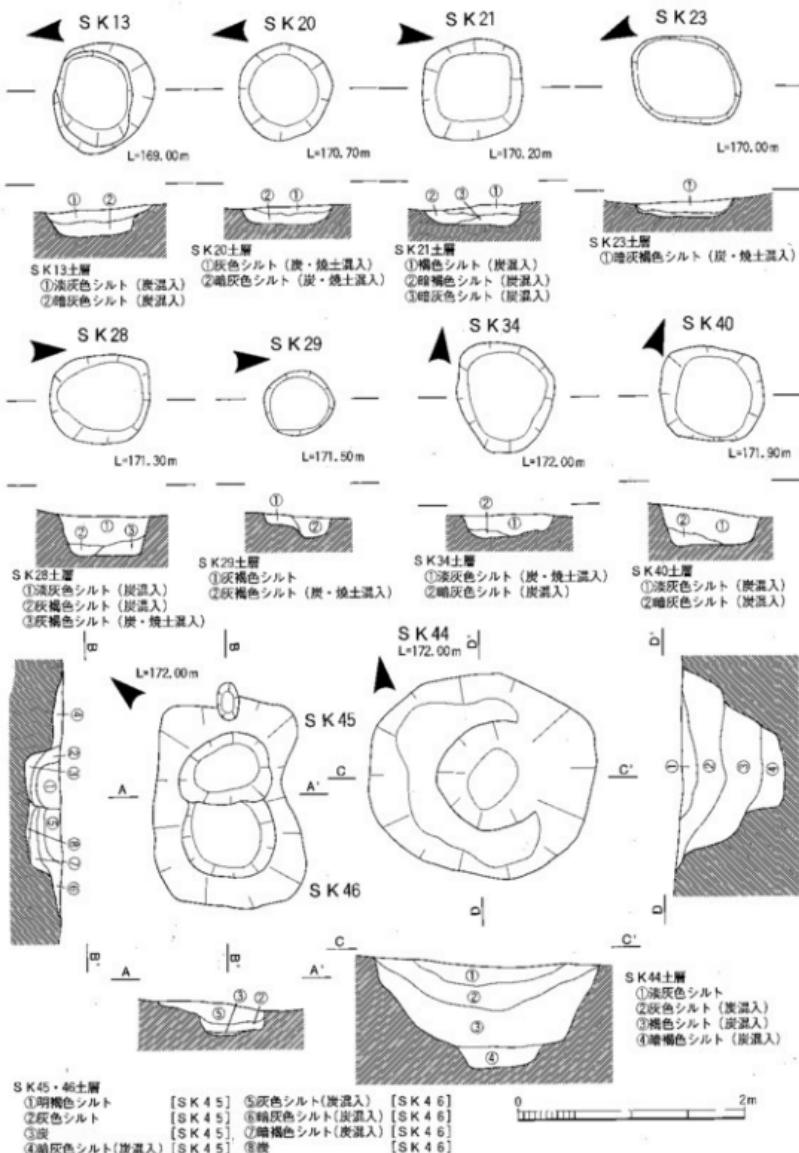


第4図 一ノ瀬遺跡遺構概略図 (1/500)、基本層位 (1/50)

- ①褐色シルト（しまり悪い）【土】
- ②淡成色シルト（しまり悪い）【縄文時代の文化層】
- ③明褐色シルト（ややしまる）
- ④淡褐色シルト（しまり良い）
- ⑤深褐色シルト（しまり良い）
- ⑥赤褐色（しまり良い）
- ⑦褐色シルト（しまり良い）
- ⑧深褐色土ブロック・褐色シルト（しまり良い）
- ⑨褐色シルト（しまり良い）
- ⑩赤褐色シルト（しまり良い）
- ⑪褐色シルト+赤褐色シルト（しまり良い）



第5図 炭窩01・02 (1/50)



第6図 燃壁ピット、SK44 (1/50)

4 遺物 (第7~10図)

遺構から出土した遺物は42のみで、あとは表探・遺構外からのものである。

(1) 石器

出土した石器は、スクレイパー 1点・石鎚 3点・剝片 13点・敲石 1点・石斧 2点・凹石 20点・擦石 1点・石皿 1点の計29点である。その分布は調査区全域に広がり、集中地点は見られない。

a スクレイパー 1はX 67・Y 22の③層上面から出土した。完形品で全長8.6cm・全幅6.0cm・厚さ1.7cmを測る。石材はチャートである。綫長剝片を素材とし先端を折り、両面から急角度の調整をほどこす。左側面に疊面を残し、右側縁が刃部である。刃部は押圧剝離により形成され、刃部角は56°~68°を測る。左側面には握りやすいように両面ともに細部調整をほどこす。背面には腹面と同一方向の先行剝離痕がある。刃部の中間部分には、使用による微細剝離が見える。

b 石鎚 すべて調査区の中央部での表探である。石材は3点ともチャート製である。2は無茎で、基部は平基を呈し、側縁は左側片に段をもち未製品の可能性がある。先端が少し折れる。3は無茎で、基部は弱凹基を呈し、側縁は外済する。4は無茎で、基部は円基を呈し、側縁は直線である。

c 剥片 図示したのは出土した13点のうち8点である。内訳はチャート製 6点(5・6・7・8・9・12)、玉髓製 1点(10)、溶結凝灰岩製 2点(6・11)である。

d 敲石 13は花崗岩製で3/4が欠損している。もとは椭円の疊であり、長軸方向の一端に敲打痕がある。

e 石斧 14・15は凝灰岩製である。14は短冊型を呈し、15は刃部の破片で、ともに未製品である。

f 擦石 34は片麻岩製で椭円形の疊の縁辺部を使用している。

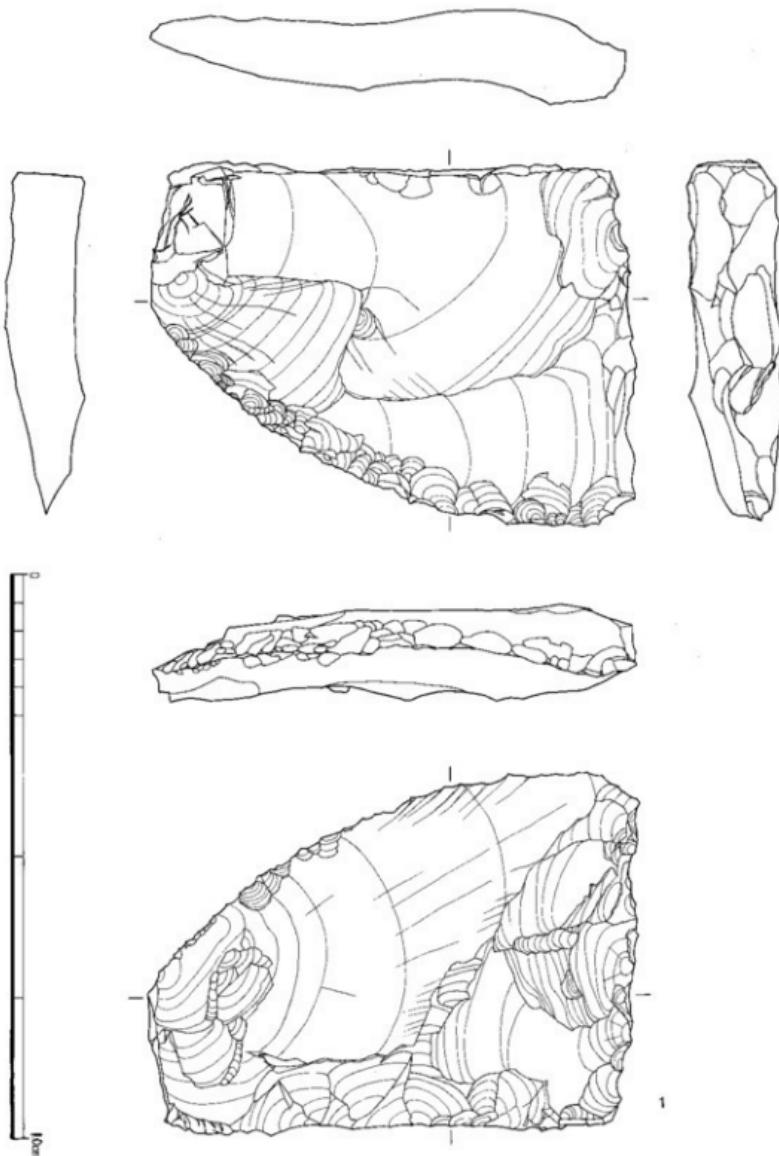
g 石皿 35は砂岩製で扁平な疊を用い皿部が浅く広い。

h 凹石 石材は多様で片麻岩(28)・砂岩(2・22・23・31・32)・凝灰岩(18・19・21・26・27)・安山岩(20・30)・粘板岩(33)・流紋岩(31)・綠泥変岩(25)がある。凹石のみではなく敲き石として使用しているものが4点(16・21・26・29)、擦石として使用しているものが1点(24)ある。

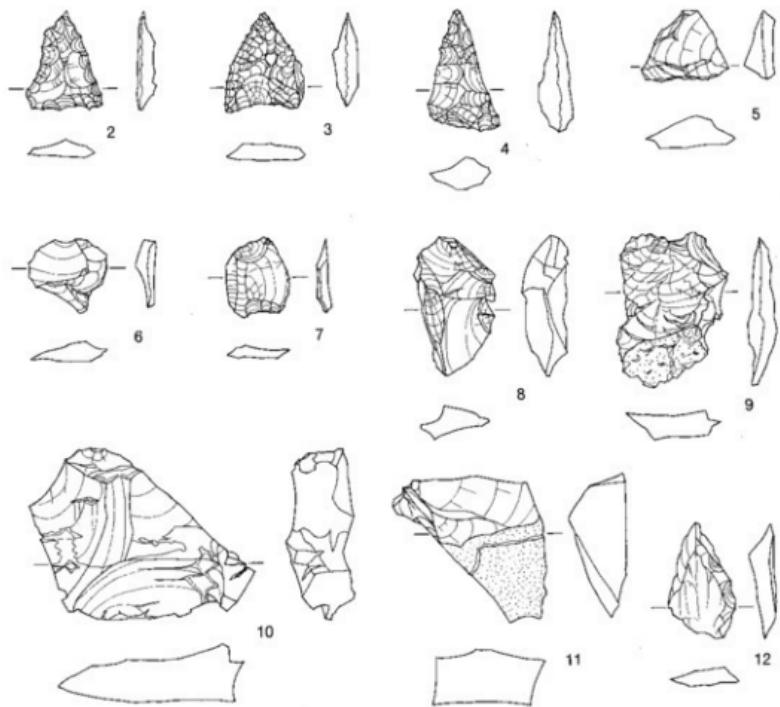
(2) 土器

a 繩文土器 調査区中央部の②層中から出土した。小破片で出土し、図示できたものは3点である。37は列点文を施す。

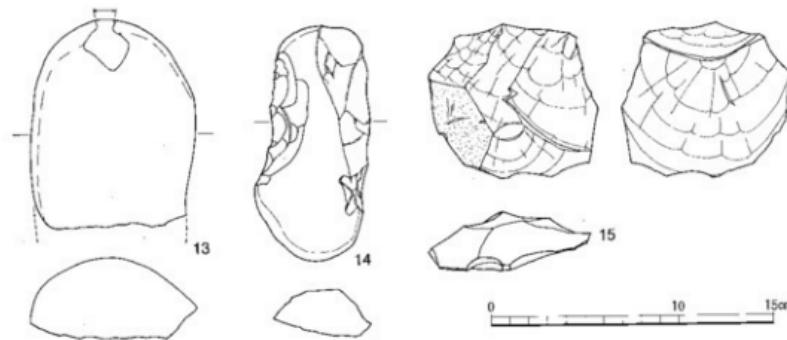
b 古代の土器 調査区南部、SK 44から出土している。SK 44から39・42が出土した。39は須恵器の壺の肩部で③層から出土した。42は土師器碗で、最下層の④層から出土した。口径12.2cm・器高4.6cmを測る。40~42は底部糸きりの土師器碗である。



第7図 出土遺物実測図 (1/1)



0 5cm

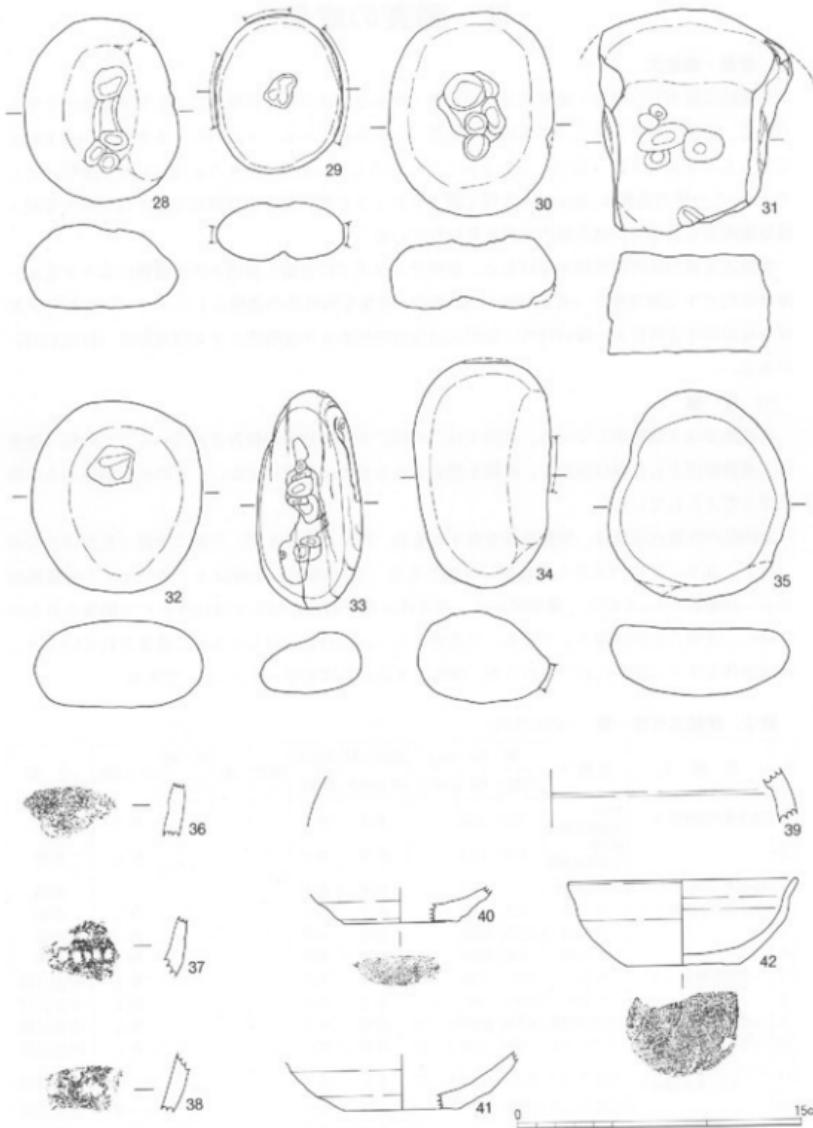


0 10 15cm

第8図 出土遺物実測図 (2-12・1/1, 13-15・1/3)



第9図 出土遺物実測図 (1/3)



第10図 出土遺物実測図 (1/3)

III. 調査の成果

1. 炭窯・焼壁穴

当遺跡で検出した炭窯・焼壁穴は、小規模・簡易な方法である伏焼法による黒炭製造窯と考えられる。炭窯と焼壁穴はその平面形態・規模で区別されている。すなわち、基本形態が長方形を呈するものを炭窯、円・橢円・方形を呈し、一辺もしくは直径が約1.5m以内ものを焼壁穴としている。この種の遺構は、從来射水丘陵で調査されてきた製鉄関連の登窯状炭窯とは形態・規模・構築場所とも異なり、別系統の炭窯と見られている。

伏焼式炭窯の県外研究例を挙げると、炭窯を3タイプに分類し初現を出土遺物により平安末～鎌倉時代とする研究報告〔菅原1990〕。焼壁穴と炭窯を同性格の遺構とし5タイプに分類し、初現を炭窯は平安時代末～鎌倉時代、焼壁穴は奈良時代から平安時代とする研究報告〔村尾1991〕がある。

(1) 炭窯

当遺跡では3基検出している。県内ではこの他に8遺跡13基が報告されている。この種の遺構は、遺物が出土した例は少なく、時期を想定できるものは非常に少ない。その平面形態から中世以降と考えられている。

富山県の伏焼式炭窯は、付属施設を有するもの（以下、Aタイプ）と竪穴を掘っただけのもの（以下、Bタイプ）の大きく2種類に分類される〔北川1988〕。規模はA・Bタイプとも長軸約4m・短軸約1.4mを測る。構築場所は、登窯状炭窯が斜面に対してほぼ直行して構築されるのに対し、伏焼式炭窯は両タイプとも、平坦面もしくは斜面に対して水平に構築されている。これは窓体を水平に保つためであろうか。実際、床面はほぼ水平（0°～3°）である。

表2 伏焼式炭窯一覧（富山県内）

No.	遺跡名	遺構名	規模(cm)		斜面に対する向き	床面の角度	煙道	溝	坑内ピット	出土遺物	時期
			全長	幅							
1	福光町明神原A	第1号 炭焼窯状遺構	500	200	—	水平	水平	○	—	—	無し
2		第2号 炭焼窯状遺構	800	120	—	直交	水平	○	○	—	無し
3	城端町南原F	炭焼窯状遺構	—	—	—	水平	水平	—	—	—	不明
4	立山町白岩藪ノ上	穴-30	425	180	—	水平	水平	○	○	○	無し
5		穴-24	約270	約180	—	水平	水平	—	—	—	不明
6		穴-09	350	約130	—	水平	水平	—	—	—	無し
7	大沢野町野沢(A)	ヰP3	160～	140	15	直交	水平	—	—	—	無し
8		スP7	350～	200	15	水平	水平	—	—	—	無し
9	八尾町長山(3次)	第1号炭焼窯跡	約350	約200	3～20	直交	水平	—	—	—	無し
10	八尾町長山(4次)	炭窯-01	350	200	3～25	直交	水平	—	—	—	無し
11	立山カントリークラブ 用賀工事場内遺跡群	炭焼窯-01	約350	約160	18～56	水平	水平	—	○	—	越中瀬戸
12		炭焼窯-02	約540	約200	21～47	水平	水平	—	○	—	越中瀬戸
13	大山町東黒牧上野(A)	炭焼窯	340	190	10～20	水平	水平	○	—	—	無し
14	大山町一ノ瀬	炭窯01	353	143	15	水平	水平	○	○	—	無し
15		炭窯02	357	160	10	水平	水平	○	○	—	無し
16		炭窯03	—	—	—	水平	水平	—	—	—	無し

現在のところ県内の伏焼式炭窯は、タイプの違いによって時期・規模や構築場所の明確な違いは認められない。今後の調査例の増加を待ちたい。

(2) 焼壁穴

当遺跡では14基検出している。県内では、製鉄関連遺跡・須恵器窯跡の周辺でこの種の遺構の検出例が多い傾向にある。現在200基近い数が報告されているが、遺構の構造が簡単なため遺構自体からの情報量が少なく形態による変化が追いにくい。また、炭窯と同様に遺物を出土したものは少なく、時期決定できるものは非常に少ない。遺物が出土している例は ①大沢野町の野沢遺跡A地点才区2号土壙から有田焼片 ②同遺跡ス区7号土壙から繩文土器片〔鈴木1982〕 ③小杉町の上野南Ⅱ A 遺跡穴13覆土上層から須恵器長頸瓶の大型破片 ④上野南Ⅳ 遺跡穴01から「U」字状鍬先2点〔池野1991〕の4例がある。

鈴木氏は①②がよく似た形態をもつため①の有田焼で時期決定をし、①②の焼壁穴（同報告では炭窯状遺構）を昭和初期と推定している。

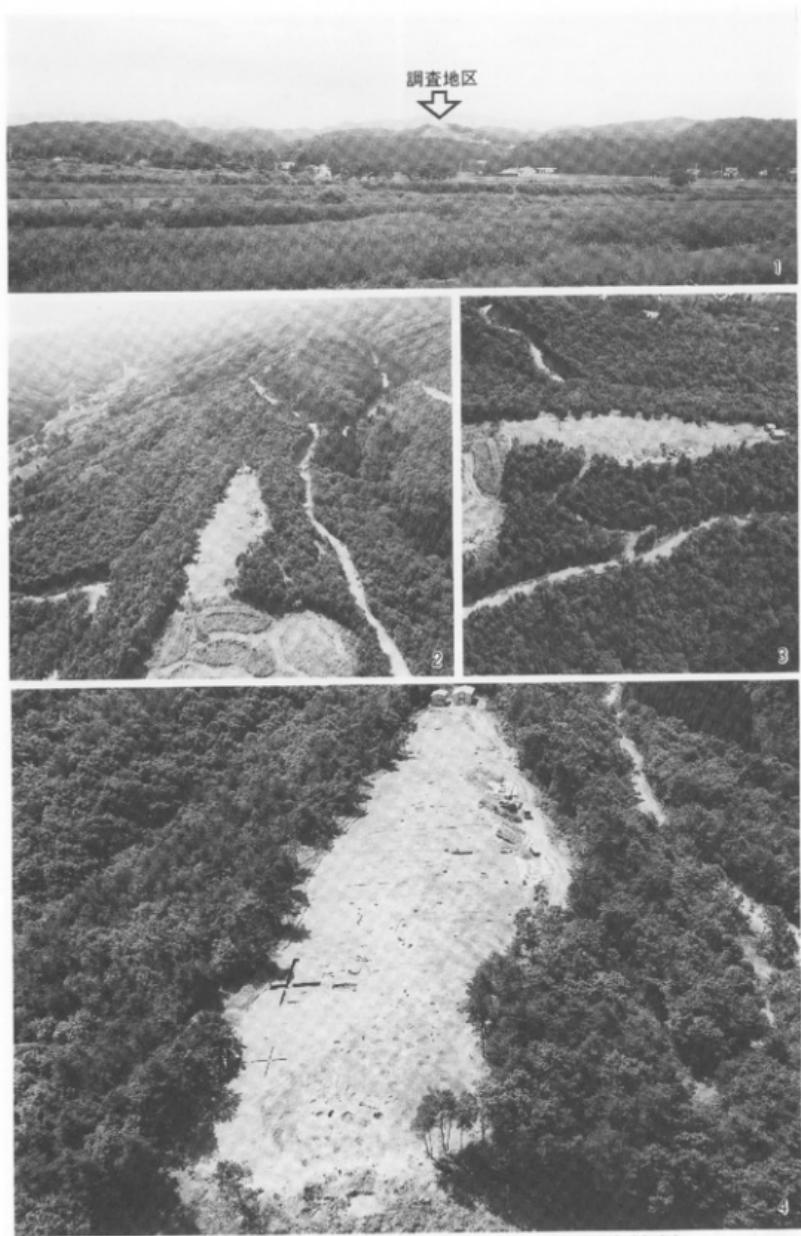
池野氏は、③について「混入の可能性も否定できないが」としながらも7世紀代の遺物とし、④については奈良～平安時代の遺物とし、③④の焼壁穴を「簡易な古代の炭焼窯」と推定している。両氏の年代観には著しい隔たりがある。しかし、これは先にも述べてたように、遺構の構造が簡単なため年代を遺物で求めることに起因しているが、これはまた伏焼法が古代まで逆登る可能性を指摘しているのである。

最後に若干の問題点を提起して終わりとしたい。

今回検出した伏焼法による炭窯・焼壁穴は、古代射水丘陵で製鉄のため組織的に操業した登り窯状炭窯とは違い、自給的に短期間操業したという考え方がある。用途としては暖房用や鍛冶用として考えられている。北陸では14世紀末頃に火鉢・行火などの炭を燃料とする暖房用具が使われ始める〔垣内1990〕。ただし、これらの暖房器具は出土例が少なく、県内においては日の宮遺跡・梅原胡麻堂遺跡で報告例が見られる程度であり、庶民層までは広がっていないようである。したがって暖房用としての炭の需要はそんなに高くなかったと考えられる。古代・中世に係る鍛冶に関しては、不明な点が多く推測の域を出ないが、炭窯の生産量から考えて小規模な精練鍛冶か小鍛冶に用いられた可能性がある。いずれにせよ伏焼式炭窯に関しては、遺物が伴わぬい遺構だけに、炭窯自体の形態的編年や分布域の研究を進めるとともに、生産された炭の消費方法なども考慮すべきであろう。

= 参考文献 =

- イ 池野 正男
岡上 進一
カ 兼康 保明
垣内光次郎
岸 清俊
北川 美佐子
久々 忠義
サ 斎藤 隆・岡本 淳一郎
鈴木 忠司
朱通 祥男
神保 孝造・島田 修一
神保 孝造・酒井 重洋
奥村 吉信
菅原 康夫
関 清・久々 忠義
フ 藤田 富士夫
藤田 富士夫・高橋 修宏
古川 知明
ム 村田 文夫
村尾 政人
ヤ 山本 正敏
- 1991 「Ⅹ 調査の成果 1. 遺構 (4)炭焼窯・(6)焼壁穴」
『上野南遺跡群発掘調査報告』小杉町教育委員会
1977 「5 福光町明神原A遺跡」『富山県福光町・城端町 立野ヶ原
遺跡群 第5次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
1986 「三 古代白炭焼成炭窯の復元」『日本考古学論集 5 生業・生
産と技術』吉川弘文館
1990 「中世北陸の暖房文化」『石川考古学研究会誌 第33号』石川
考古学研究会
1988 「埼玉における木炭生産と炭窯の変遷」『研究紀要 第10号』埼
玉県歴史資料館
1988 「立山カントリークラブ増設工事地内遺跡群発掘調査概要」
立山町教育委員会
1986 「地中に埋もれた大山の歴史」『大山歴史だより』大山町教育委員会
1989 「大山学園都市建設に係る埋蔵文化財試掘調査報告 東黒牧遺
跡東福沢遺跡」大山町教育委員会
1990 「第1章 大山のあけぼの」『大山の歴史』大山町
1990 「富山県大山町東黒牧上野遺跡A地区発掘調査概要」大山町教育
委員会
1982 「第ⅩⅠ章 第4節 炭窯状遺構とその遺物」『富山県大沢野町
野沢遺跡発掘調査報告書 (A地点)』大沢野町教育委員会
1988 「比企地方炭焼き－嵐山町遠山の白炭窯の制作工程について－」
『研究紀要 第10号』埼玉県歴史資料館
1987 「富山県八尾町長山遺跡発掘調査概要(3)」八尾町教育委員会
1981 「Ⅱ 白上戸ノ上遺跡」『富山県立山町埋蔵文化財緊急発掘調査
概要 白上戸ノ上遺跡 吉峰遺跡』立山町教育委員会
1991 「遺物をもたない遺構－伏焼炭窯に関する予察－」『徳島県埋
蔵文化財センター年報 Vol.2 1990年度』財団法人 徳島県埋
蔵文化財センター
1984 「富山県大沢野町八木山大野遺跡」大沢野町教育委員会
1971 「第2節 須恵器・土師器」『小杉町中山南遺跡調査報告書』
富山市教育委員会
1973 「富山市北押川遺跡」富山市教育委員会
1975 「富山市古沢遺跡発掘調査報告書」富山市教育委員会
1983 「古沢A遺跡発掘調査概要」富山市教育委員会
1984 「富山市野下遺跡発掘調査概要」富山市教育委員会
1991 「発掘された炭焼窯の基礎的研究」『物質文化 55』物質文化研究会
1991 「炭溜り土壌について」『淡神文化財ニュース 第13号』
1977 「14 城端町南原F遺跡」『富山県福光町・城端町 立野ヶ原遺
跡群 第5次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会



図版1 1. 調査地区遠景（北から） 2. 遠景（北から） 3. 遠景（西から）
4. 全景（北から）



1



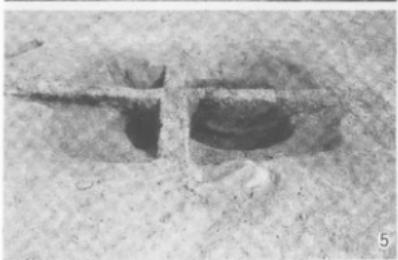
2



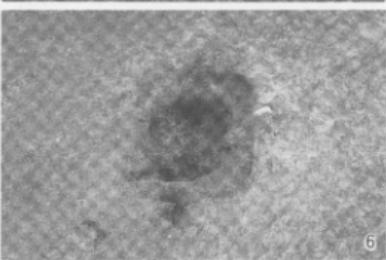
3



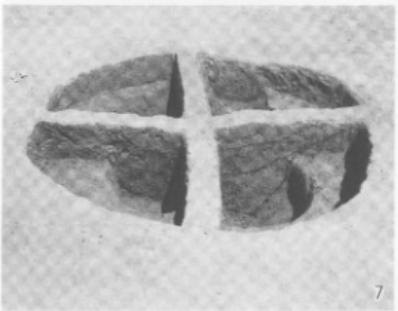
4



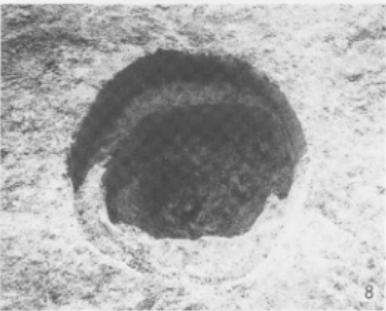
5



6

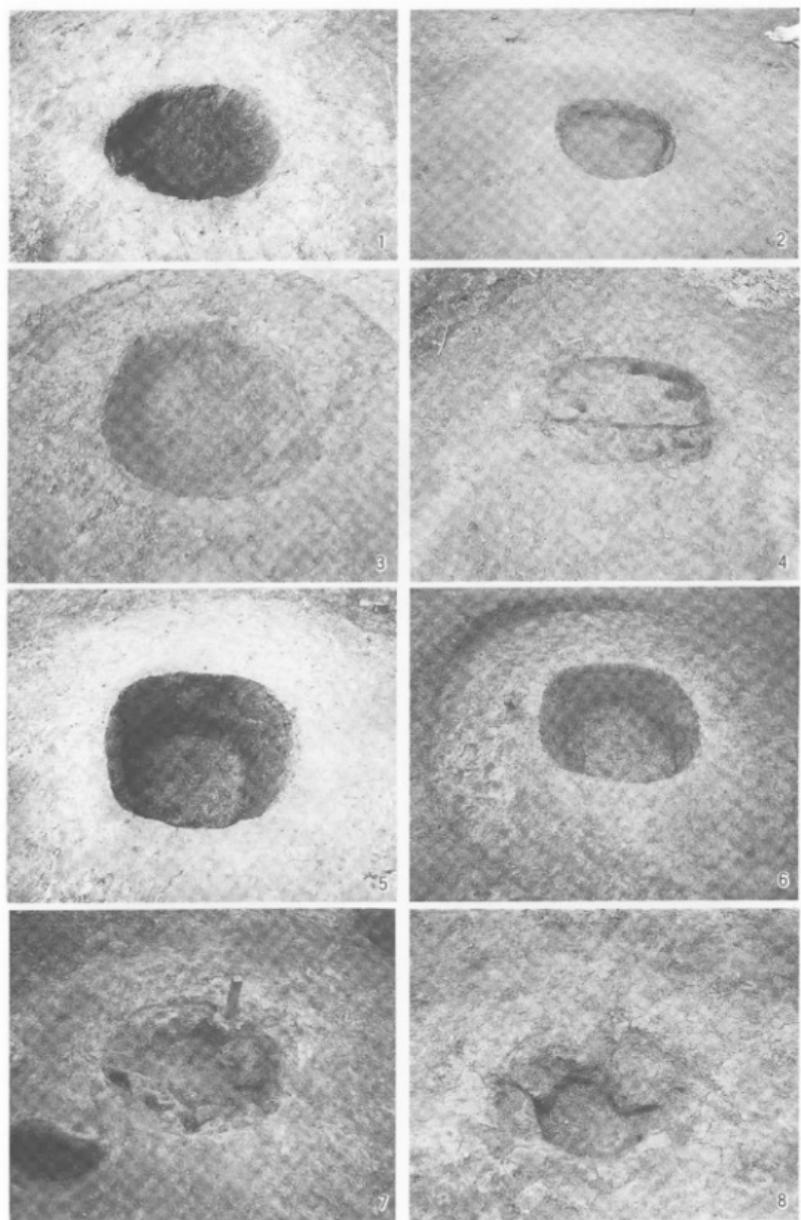


7

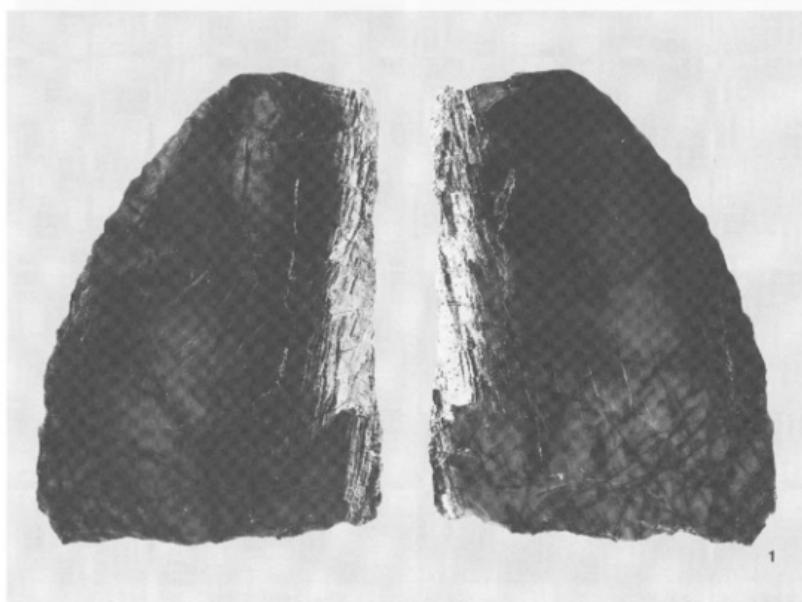
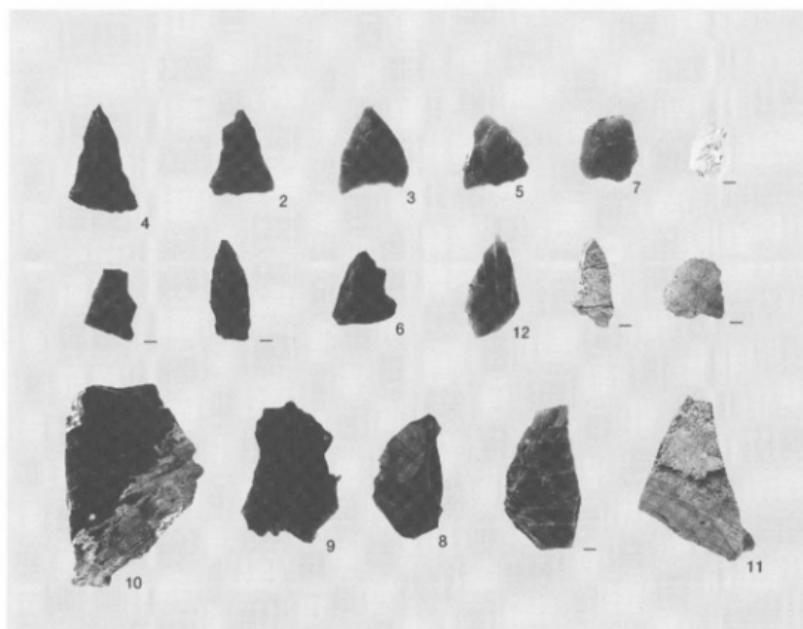


8

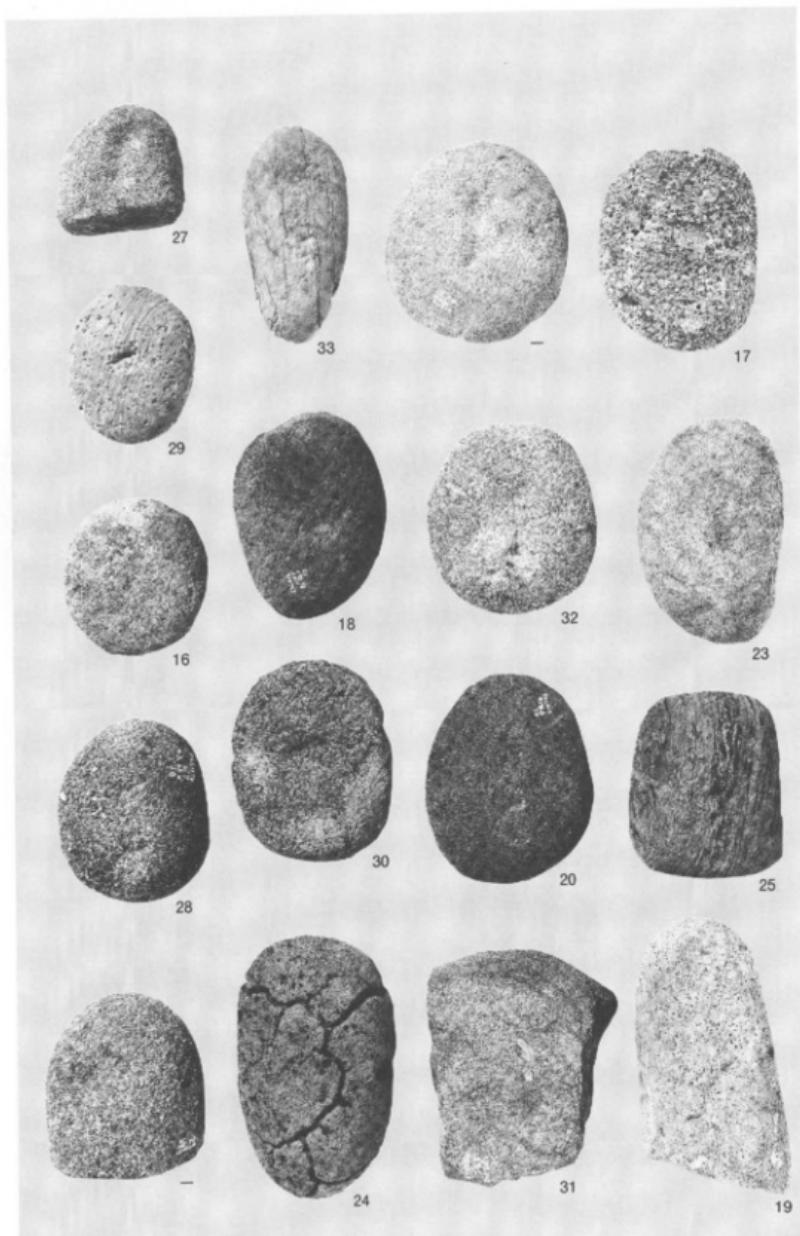
図版2 1. 炭窯01(西から) 2. 炭窯01(南から) 3. 炭窯02(南から)
4. 炭窯02(東から) 5. SK45(南から) 6. SK45(北から)
7. SK44(南から) 8. SK44(東から)



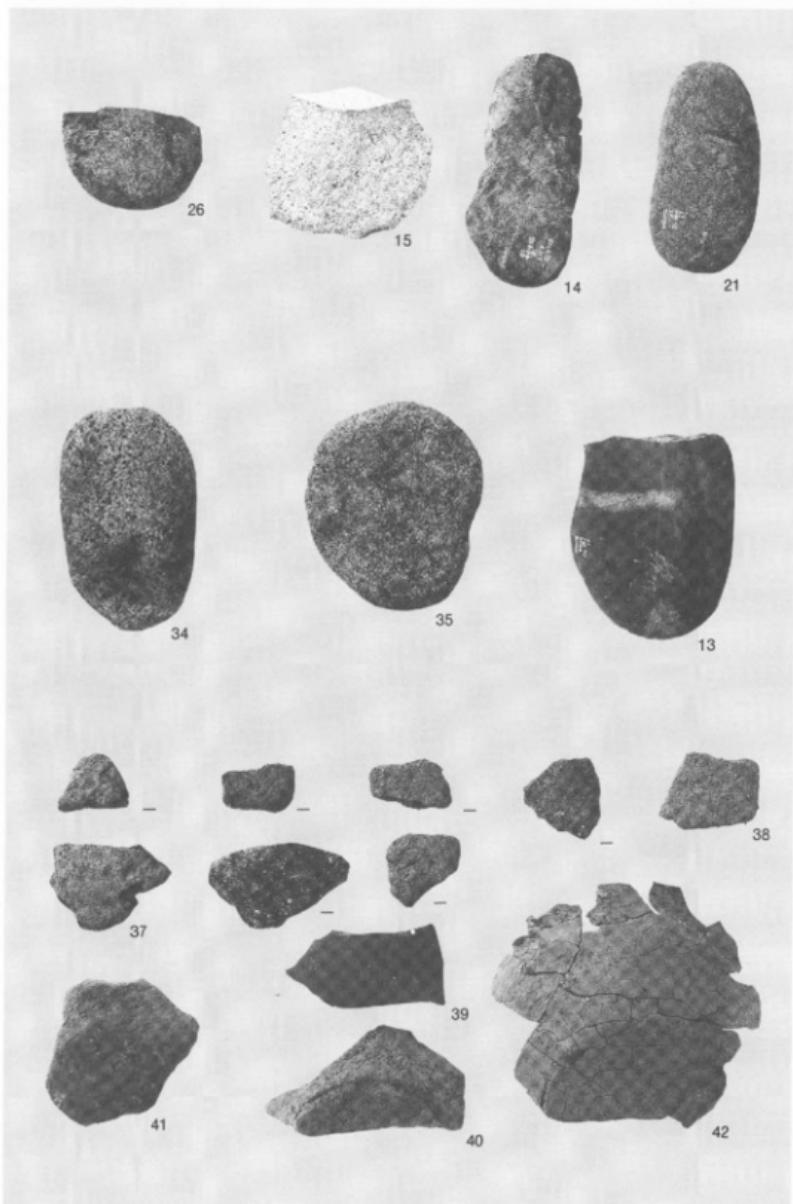
図版3 1. SK20 2. SK34 3. SK21
4. SK23 5. SK28 6. SK40
7. SK42 8. SK43



図版4 出土遺物 ※番号は実測番号



圖版 5 出土遺物



图版 6 出土遗物

報告書抄録

ふりがな	とやまけん おおやまち いちのせいせき はくつちょうさ ほうこく						
書名	富山県 大山町 一ノ瀬遺跡 発掘調査 報告						
副書名	ゴルフ場建設に伴う発掘調査						
編著者名	高梨 清志						
編集機関	富山県埋蔵文化財センター						
所在地	〒930 富山県富山市茶屋町206-3 TEL 0764-34-2814						
発行機関	大山町教育委員会						
所在地	〒930-13 富山県上新川郡大山町上滝523 TEL 0764-83-1211						
発行年月日	西暦1994年3月18日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °°°	東経 °°°	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
一ノ瀬	富山県上新川郡 大山町東福沢	16302 035	36°35'21"	137°15'23"	19920629 19920826	4036	ゴルフ場建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
一ノ瀬	散布地 炭窯	縄文 古代	土坑(古代) 炭窯(時期不明) 焼壁ピット(時期不明)	縄文土器 須恵器、土師器 石器			

平成6年3月18日発行

富山県大山町

一ノ瀬遺跡発掘調査報告

—ゴルフ場建設に伴う発掘調査—

編集 富山県埋蔵文化財センター

発行 大山町教育委員会

富山県上新川郡大山町上滝523

印刷 株式会社チューワツ